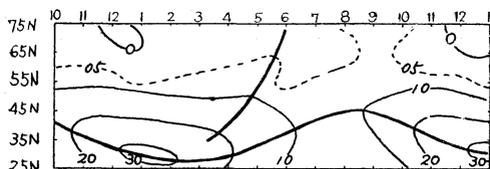


東経 140 度の偏西風プロフィールから見た梅雨

藤 井 辰 男*

ジェット流の状態が天気と密接な関係にあることは日
日予報のみならず、平均図を使用する長期の予報におい
ても、これを重視する必要があることは種々の研究調査
によって明らかにされている。本邦の梅雨期に関しては
特にダブルジェットが指摘されている。この機構を簡便
な形で長期予報に導入する目的で、また冬季気温と夏季
気温との関係等の考えにもとずいて、1948年10月以降の
東経 140 度の 500mb 面月平均地衡風の東西成分のプロ
フィールを検討してみた。



第 1 図 東経 140° の偏西風東西成分の年平均状態
のインプレット

第 1 図に米国気象局発行の 500mb 月平均ノーマルチ
ャートから計算した東経 140 度の地衡風東西成分のプロ
フィールを示す。この図から、本邦附近では平年の状態
として 3 月頃から中緯度強風帯の分枝が北上し、中緯度
偏西風は急激に衰え、かつこの分枝の北上は 6 月頃北
限（北緯 75 度）に達している。これが梅雨と密接な関係
にあるものと考えられる。

第 2 図は 1948 年 10 月以降の東経 140 度の偏西風**のプロ
フィールである。この図でも前に述べた偏西風の分枝
の北上が毎年種々の形態で起っているのが認められる。
そして強風軸の分流状態がおそくまで続いた年は梅雨の
あけがおくれている。またあけの早い年は一般的に分流
のはじまるのが早い。しかし 52, 56 年のように分枝の北
限到達後も異形のダブルジェットを形成している年もある。
そしてこれら分流は出現型式が複雑な年があるので
これらから予報的なものは確認できなかった。しかし冬
季の偏西風が強い年程分流が早く起っている。すなわち

一般的に冬の偏西風の強い年ほど梅雨のあけは早い。こ
のことをさらに詳細に検討すると、最近 9 年の偏西風
の状態は第 1 表に示すように次の 4 つの型に分類出来る
ように思われる。表中の各要素は東京の値である。

- 1 型：強風軸が 1 月に近づくにつれて次第に強まり、
かつ南下し、1 月にはかなりの強さとなる。こ
の頃をピークとして以後次第に弱まり北上傾向
となるもの。
- 2 型：1 型と略々同様であるが強さの最強がやや 2 月
の方によっているもの。したがって 1 月の強風
軸は 1 型にくらべて弱い。
- 3 型：1 型とほぼ同様であるが強さの最強がやや 12 月
の方によっているもの。したがって 1 月の強風
軸は 1 型にくらべて弱い。
- 4 型：強風軸の変化が 1 型と著るしく異なるもの、1
月の強風軸は弱い。

第 1 表

年	型	梅雨明け	日照率%		日照指数
			6 月	7 月	
1949	変形 1	VII 11	27	52	79
1950	3	// 8	29	56	85
1951	3	// 18	39	37	76
1952	2	// 16	31	36	67
1953	4	// 24	19	29	48
1954	4	// 25	19	24	43
1955	1	// 9	34	56	90
1956	2	// 26	33	30	63
1957	4	// 28	24	21	45

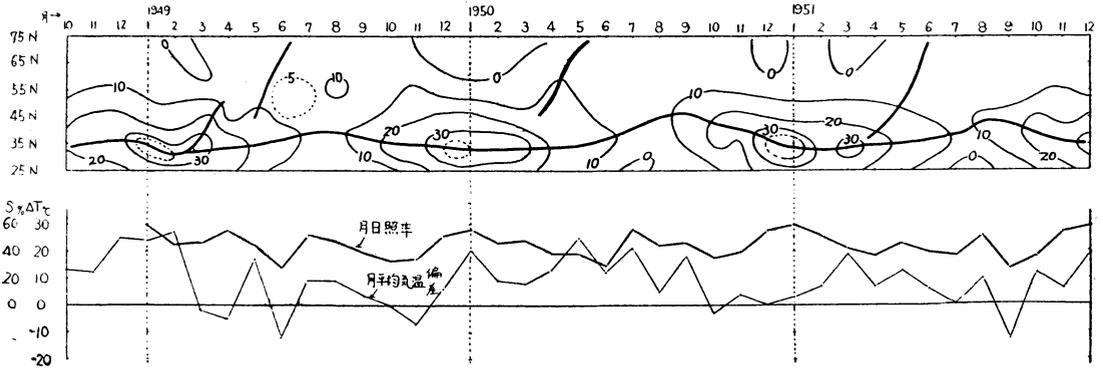
これらの型の比較は第 2 図を見ればよいが、その特徴
的な盛衰状況を示すために 1, 2, 3, 4 型の例としてそれぞ
れ 55, 52, 50, 54 年の北緯 35 度の偏西風東西成分の変化
を第 3 図に示す。

これらの年の分流は

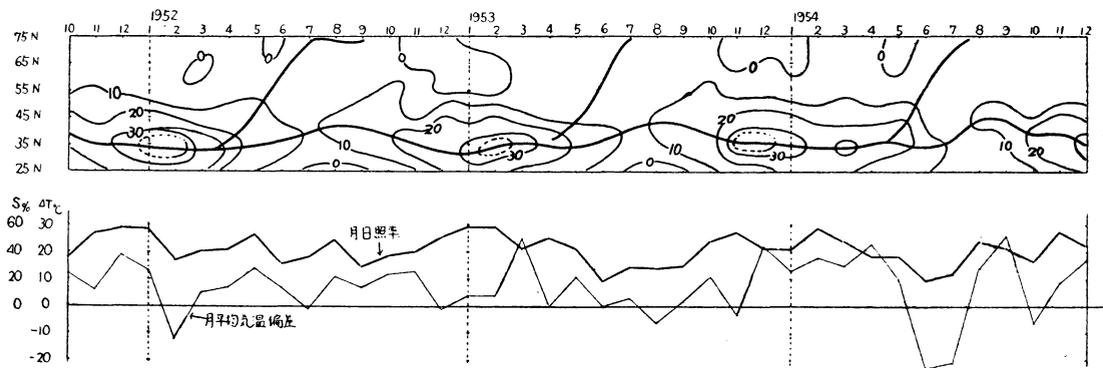
- 1 型：3 月以前に分流が出現し、5 月頃に終っている。
る。
- 2 型：4 月頃に分流が出現し、7 月頃に終っている。
- 3 型：3～4 月頃に分流が出現し、6 月頃に終ってい
る。

* 気象庁予報部 —1958 年 4 月 26 日受理—

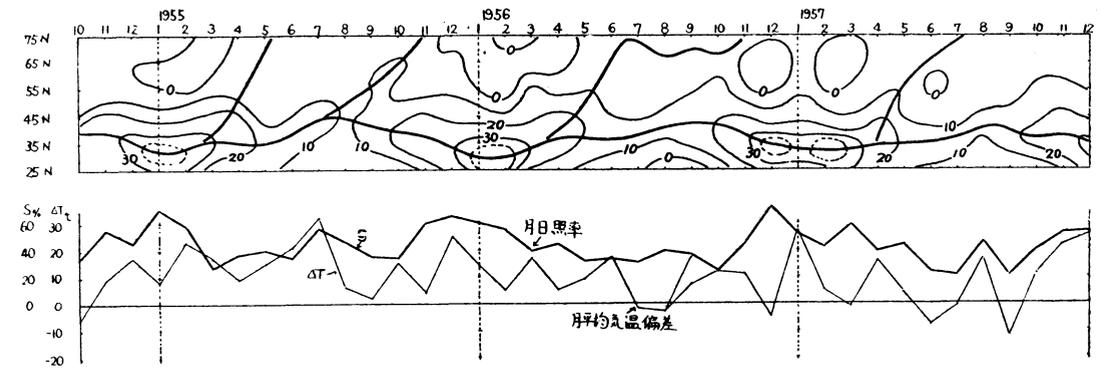
** 1949 年以降は半旬値から計算してあるので、月の
区切りが 1～2 日ずれている月もある。



第 2 図 (a) 偏西風東西成分のインプレットおよび月日照率, 月平均気温偏差



第 2 図 (b) 偏西風東西成分のインプレットおよび月日照率, 月平均気温偏差



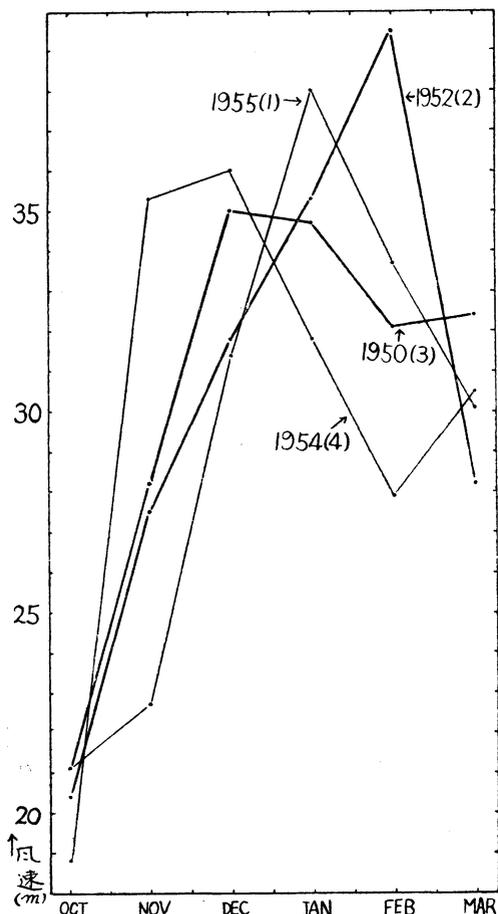
第 2 図 (c) 同 上

4 型: 4~5 月頃に分流が出現し, 7 月頃に終わっている。

また梅雨の一般的性質は,

- 1 型: 梅雨のあけは早目で, 梅雨の性質はかなり弱い。(高温多照傾向が強い。)
- 2 型: 梅雨のあけはおくれる傾向がある*。梅雨的性質は並。
- 3 型: 梅雨のあけおよび梅雨的性質は並。
- 4 型: 梅雨のあけはおそい。梅雨的性質は強い。(低

* 1952 年のあけは, 日照時数および降水量から 7 月 20 日ととってもよいと思われる。また 1956 年は 7 月 17 日をあけにとつてもよいような日照時数, 降水量であった。つまりあけがぼやけている。(中旬後半以後である)。



第3図 各型の北緯 35°における風速の月変化

(温寡照傾向が強い。)

これら各型の梅雨の性質の一端が東京の日照にあらわれている。即ち6月と7月の日照率の和をかりに梅雨期の日照指数とすると、第1表に示すように日照指数は1型が90、2型60~70、3型70以上、4型40合となっている。勿論すべての年についてこのように整然とした数値関係が得られるとは考えられないし、また東京の気候的地域代表性も検討する必要がある。しかし梅雨の一般的な性質は示されていると思う。さらに前にのべた梅雨的性質に関しても、梅雨の入りからあけまでには中休みもあり、種々の状態があるので詳細な検討を要する。しかし統計年数も少ないので、強風軸の変化およびそれに伴う弱風軸の変化、それらに対応する地上高緯度高気圧、中緯度高気圧、三陸高気圧および低気圧経路等と共に、資料の増加をまってその調査を行ないたいと考えている。

以上9カ年について偏西風プロフィールを4つの型に分類したが、この外にも種々の複雑な出現型式を示すであろう。しかしこの結果は、1型的なもの(比較的高温多照型の梅雨)と2型的なもの(比較的低温寡照型の梅雨)およびその中間型的なもの(2型的なもの3型的なもの)とおおよその判別をすることによって梅雨に関する概略の長期予想の可能性を示すものではなかろうか。しかしこれらのことはまだシノプティックに検討されておらず、また統計年数も少ないので見掛上の現象であるけねんがある。しかし最近9カ年の検討結果を中間的に報告する。

「雲 鏡」

<予報発表のデラックス> ク・サ・キ生

一年ほど前「明日は北西の風、晴れたり曇ったり、この予報の当たる確率70%」と言う具合に、天気予報に確率を加えて発表したら？ と半ば冷やかし半分はこの欄で提唱したら、某氏から意外に激励？ の辞を得た。それから半年ほど経って京阪地方の天気予報をABC(朝日放送)で聞いていたら明日は「雨が降りそうにもありますが、この前線は弱いために案外曇ておるかも知れませんが」などと気象情報をたくみに識り込んだ天気予

報を聞いて感心した経験がある。さいきん九州管内のテレビで発表する予報では風景が出たり童謡人形を使ったりして人目を引いているから予報発表の形式もだんだん改善かつ多種になってきているし、またそうなるべきだと思う。予報を出すまでの労苦(例えば気象観測、天気図作成等)が大きいので、もう少しモッタイを付けて、Varietyな形式にしてもいいような気がする。前述の確率追加もだが、予報の後に、担当は<山川予報官でした>等といれると、<山川さんのはよく当たるわね>てな具合にならないかしら、とにかく予報発表は、当るにせよ当たらないにせよ、デラックス版と行きたいものである。